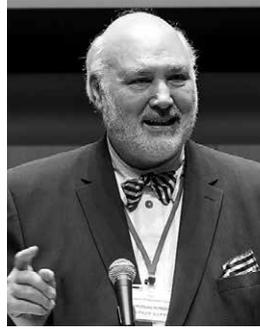


## 「共有と交換」

— 文化的な教育はドイツ連邦共和国の対外文化政策における新しいパラダイムとなるか

ヒルデスハイム大学  
ヴォルフガング・  
シュナイダー



文化政策は市民社会そのものあり方にかかわり、市民の自己理解から大きな影響を受ける。ひとつのネーションにひとつの文化があるという文化の理解は今日では否定されている。国家の中

にある諸文化を捉えていくことが重要だ。文化の多様性というと、文化生産や発信の多様性ばかりに着目が集まる。しかし、文化の受容・文化活動への参加・関与のあり方こそが多様化せねばならず、そうした関与の基礎力を養成するために「文化的な人間形成（文化的な教育）」が極めて重要である。

対外文化政策の鍵概念として「共有と交換」がある。ドイツはプラント時代から、芸術を「輸出」することを好ましく捉えてはいない。双方向で文化を交換しあう、学び合う姿勢が基本だ。その際、誰が何をどのように伝えていくのかを多様化させる鍵が「文化的な人格形成」である。後にゲーテ・インスティテュートの総裁となるヒルマー・ホフマンは70年代からそう

唱えてきた。ヒルデスハイム大学では、「文化的な人格形成」の技能を身につけ、生涯をかけて自分たちも生産的に社会に関わっていきけるよう、講座も設けている。

対外文化政策は、外国で展示会を実施したり、共同制作で作品を完成させたりすることを「成功」と定義してはいない。過程を重視するため、催し自体は失敗してもよい。共通の課題を扱う文化事業を共同で行い、その時間を「共有」する中で意見を「交換」し、信頼関係を醸成し、最終的に様々な議論の対等な「対話」のパートナーとなるのが目標だからだ。ベルリン・フィルを世界に紹介することを好ましく評価した時代は過ぎ去り、リミニ・プロトコルのように、フォルクスワーゲンの中国工場に入っていく、「グローバル化とは何か」を主題に共同で演劇制作を行い、対等な対話へと繋げていくのが今日的なやり方である。学生の留学も同様だ。

芸術家や市民社会など、こうした活動の担い手こそが、ジャーナリズムが発見した大々的な文化のみならず、普遍的な人権さえ侵害されている少数派の人々の文化を常に発見・発信・受容し、対話に繋がる土壌を形成していくのだ。

Profile  
ヴォルフガング・  
シュナイダー  
Wolfgang SCHNEIDER

●ヒルデスハイム大学教授、同大学附属文化政策研究所所長。博士（フランクフルト大学）。自治体文化政策・映画政策・演劇政策・児童のための文化政策から対外文化政策まで、幅広い領域を研究対象とする。国際児童青少年演劇協会（ASSITEJ）ドイツセンター名誉会長、ドイツユネスコ委員会委員、ドイツ連邦議会文化諮問委員などを歴任。ヒルデスハイム大学文化政策研究所を拠点とする芸術と発展のための文化政策の UNESCO チェアホルダー。